



A L P S C A R E E R

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第49回＞

65歳で司法試験合格。 市役所定年後に 弁護士を目指す



吉村 哲夫

司法修習生（元福岡市職員）

【よしむら てつお】九州大学法学部卒業後、福岡市役所入庁。スポーツ部長、国際部長、市民局長、東区長、監査事務局長などを経て、定年退職。京都大学法科大学院卒業後、司法試験合格。現在司法修習生。今年8月、著書『65歳で司法試験合格 私の勉強法』（ばる出版）。

私は、福岡市役所を定年退職後、京都大学法科大学院に進み、昨年、最高齢の65歳で司法試験に合格しました。「何を今更」の挑戦、私は、様々なハンディや困難に直面しました。皆さんの中にも、新しい自分や将来に向けて、いろんな夢や目標を立てられている方も多いと思います。しかし、どんな夢や目標であっても、その実現には必ず、困難が伴います。それに直面し、悩み苦しみながらそれを乗り越えていくことが人生であり、それ自体が幸福なのだと思は、思っています。

1 何故、弁護士を目指したのか

「余生」ではなく「人生」を生きる

定年というのは、ある意味サラリーマン

にとつての「戦力外通告」です。それまでは、会社や役所が「行くべき場所」「するべき仕事」を決めてくれ、与えてくれます。定年後は「もう面倒見ませんよ、自分で決みなさいよ」ということです。プロ野球選手の「戦力外通告」に似ています。「戦力外通告」を何度も経験しながら47歳まで現役を貫いた現ソフトバンクホークス監督の工藤公康選手がいます。彼は、将来いい監督の口が見つかるようにとか、まだ選手として高い年俸を得たいからと47歳まで現役を続けたのでは決まらないと思います。まだ自分には「残された力」があるはずだ、何とかそれを掘り起こして発揮したいというのが、現役を続けたかった理由だったと思います。つまり、彼は、野球選手としての死に方を考えたのではなく、「残された力」を発揮することを考えたのだと私は思うのです。

私も、いろんな持病を持ち、肉体の衰えも痛感し、「定年」「余生」という言葉を考えるようになればなるほど、それは「どう死ぬか」ではなく、残された「人生をどう生きるか」という問題だと考えるようになりました。定年後の人生、今までの人生のように、いや、それ以上に、よりよく生きていく、自分に「残っている力」を精一杯発揮する、つまり、「余生」ではなく「人生」を生きたいと考えるようになったのです。

最後まで仕事したい

「残された力」の発揮の仕方には、「趣味を極める」「田舎暮らしをして自給自足する」「シニア起業する」など、人それぞれに応じた素晴らしいいろんなやり方があります。

私の場合、現役の頃は、毎日朝起きたとき、その日の様々な課題が頭をぐるぐるとき巡ります。通勤しながらそれをどうするか

2 夢と現実

定年退職後に法科大学院合格

あれこれと考え、その日一日をかけて知恵を絞ってそれらを解決していきます。自分の意見が通らないと言っては嘆き、部下が言うことを聞いてくれないと言っては悩みます。そんな日々は、当たり前の日常ですが、「自分の生きる力」を發揮しているという意味で本当に幸せな毎日だったと思いつ返すことができます。

「やっぱり、自分は、定年後も、朝起きたら行くところがあり、考えることがある生活を送りたい。最後まで仕事をして人や社会と関わり、少しでも人の役に立ちたい。それが自分には合っている」。私は、そう思うようになりました。

弁護士であれば、気力がある限り一生仕事ができます。朝起きたとき、今日の予定の法廷や法律相談などあれこれと考える必要もあります。当然のことながら、多くの人の悩みや不安、トラブルを解決するために人に寄り添って仕事をしていくことになります。

さらに、私は、市役所の仕事を通じて、高齢者の方々が多くの問題や困難に直面している現実を見してきました。定年後は、自分も高齢者の一人として、同じ気持ちと視線で、行政の経験を含め、何か役に立つことができるのではないかと常々考えていました。弁護士という職業を考え始めると、それが実現可能性のある具体的な目標として見ることができるようになりました。

法律の勉強を始めた当時、私は、福岡市の東区長でしたので、土日の出勤も多く、公私を含めて、飲み会もかなり多かったので、こまめな時間をつくり、自宅では、食事と入浴と運動のためのプール以外は、ほとんど机に向かって勉強していました。好きな写真撮影、クラシック音楽や歌舞伎の鑑賞といったことは、すべて封印しました。

定年後は、京都に住むというのが私のもう一つの夢でしたから、学校は京都と決め、定年退職した年、京都大学の法科大学院を、社会人枠ではなく、現役の学生と同じ「既習」コースで受験しました。受験で体力をすっかり消耗し、ヘトヘトになって福岡に帰ったのを覚えています。

「あきらめて帰ろうかな」

幸い、京都大学法科大学院に合格。こうして、妻と2人の京都生活が始まりました。平日は、大学院で授業を受け、週末は、大好きな京都の神社仏閣をめぐって、京料理に舌鼓を打つ、それが私の考えていた京都ライフでした。

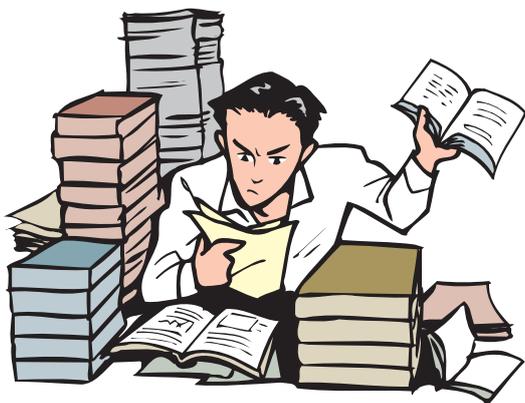
しかし、それは、入学して1週間も経たないうちに、無残にも打ち砕かれてしまいました。実際に授業を受けてみると、授業

のレベルはとてつもなく高く、スピードも速く、それについていくのに、何をどう学習しているのかさえ全く分からない状態でした。まさに地獄の日々が始まりました。

誰一人知っている人はいません。同級生に聞こうにも、名前を知っている同級生は一人もいません。毎晩夜中の3時まで勉強しても、次の日の授業の予習が終わらない日々が続く、入学後2か月で、私の体重は見る見るうちに7キロほど減りました。「もうあきらめて福岡に帰ろうかな。やっぱりこの年齢では、無理だったのかな？」何度もそう思いました。

やれるかもしれない

ともかく、「何とか、ついていくしかない。授業には必ず出席して懸命に聞こう」と考



京都大学法科大学院入学式の日



え直しました。一生懸命の熱意と意欲は、若い人にも十分伝わります。私が何とかついていこうと勉強に真剣に取り組む態度が受け入れられたのか、私に親切にしてくれる輪が段々と広がり、休み時間に、話しかけてくれる同級生も増えてきました。予習の要領も少しずつ分かり始めてきました。それでも、大半の同級生は20代前半で、私より40歳ほど年下。年齢的には一人だけ浮いていました。どうしても必要な情報をうまく得ることができません。「その輪に入れてもらうには、自分が同じ目線になるしかない」。まず、隣の席の仲のいい同級生にツイッターの使い方を教わり、同級生をフォローし始めました。野球の話など私で

もできるツイートをしながら、勉強や授業の情報も得ることができました。髪型も、生まれて初めて美容院に行き、若い同級生と同じワックスで髪を立てるスタイルに変えました。

1年程の間、同級生として「仲間」になろうと頑張っているうちに、気楽に話せ、何となく気の合う同級生2人に巡り合い、週2回、3人で集まり、授業の復習をしたり、司法試験の過去問の勉強をしたりするようにになりました。こんな仲間ができた頃から、いい歯車がカラコロと回り始めました。私は、何とか京都大学法科大学院を卒業することができ、その後昨年の司法試験にも合格することができたのです。

3 英語が開いた新しい世界

『続基礎英語』から始まった

新しい自分を目指して、目標に向かって頑張ったことは、福岡市役所の公務員時代にもありました。「自分からアピールできるものを何か身に付ける必要がある」と考えるようになり、当時37歳の私は英語の勉強を始めたのです。

英語の勉強をすると決意したものの、英語は呆れるほど完全に忘れていました。まず、中学2年生向けのラジオ『続基礎英語』を聞くことから始めました。幸い英語の勉

強は、いつでもどこでもできます。朝夕の通勤の途中を含め、時間さえあれば、いつもイヤホンに耳に当てていました。やり始めたら、のめりこんで熱中する性格、勉強を始めて2年ほどで英検1級に合格することができました。

家族でアメリカへ

丁度その頃、全世界の大学生のオリンピック、ユニバーシアード大会を福岡で開催することになり、福岡の前の大会がアメリカ・ニューヨーク州のバッファロー市で開催されることになっていましたので、私は、その大会を運営するNPOへ2年間研修に行かせてもらうことになりました。41歳のときでした。

私は、妻と3人の子供と一緒に、ナイアガラの滝のすぐそばにあるバッファロー市に渡りました。名前を聞いたこともなく、頼る人も誰もいない土地にいきなり行き、アメリカ人ばかりの職場で働いたのですから、書き尽くせないほど様々な経験と苦勞をしました。

あれだけ勉強し、自信があった英語ですが、アメリカでは、英語にとっても苦労しました。シニアスタッフ（幹部）ミーティングにも毎週出席させてもらったのですが、最初は、今、会議で何が議題となっているのかさえ理解できませんでした。同僚と3人で食事に行っても、同僚の2人が私に話かけてくるときは分かるのですが、同僚が



2人だけで会話を始めると、何の話をして
いるのかついていけませんでした。

要するに、日本で英語の勉強していたと
きと異なり、容赦のない英語に晒されたの
です。2年経って帰る頃には、幹部会議の
内容についていくこともでき、発言するこ
ともできるほどになりましたが、この訓練
は、その後、国際スポーツ大会運営の仕事
の中で、国際水泳連盟などと英語で交渉や
協議をするときにとっても貴重なスキルにな
りました。

英語が私の仕事を広げた

英語を勉強し、さらにアメリカで英語を
実践的に勉強する機会を得たことよって、
それからの私の仕事の内容は一変しました。
ユニバーシアード福岡大会、世界水泳選手
権大会福岡をはじめ、福岡で行われる国際
スポーツ大会の準備や国際会議の開催など

が仕事の中心になりました。私が37歳から
勉強を始め、アメリカで実践を積んだ英語
が本場に役に立ちました。

様々な国の人と英語で交渉し、ときには
喧々諤々の議論もしました。英語はコミュ
ニケーションの手段です。英語がうまいか
どうかではなく、ある仕事を一番熟知し、
判断できる人間が、その交渉相手と英語で
直接コミュニケーションができることが重
要です。そうすれば、交渉がスムーズに行
くだけでなく、相手方との人間的な信頼関
係を築くことができます。つまり、英語の
ナンバーワンではなく、その仕事に関して、
相手方と英語で交渉できるオンリーワンに
なるということがとても大事なのです。

4 私は今、司法修習生

「終活」ではなく「就活」

私は、司法試験合格後、昨年（平成26年）
12月に、司法修習生となりました。司法修
習生とは、民事や刑事の裁判実務、検察官
の実務、弁護士業務の実務の修習を1年間
受けるものです。

修習が終わって、弁護士になるためには、
弁護士事務所への就職をする必要があります
ですが、私は、残念ながら、今のところ就職
先は決まっていません。やはり、私のよう
な65歳という年齢は、弁護士としての就職

にも相当な壁です。しかし、「何を今更」
の挑戦にハンディは覚悟の上です。私は今、
「終活」ではなく「就活」を頑張っています。

どんな弁護士になりたいか

弁護士になるという私の目標には、いま
でも様々な困難がありました。そして今後
も、それは続くと思います。しかし、その
ような困難に直面し、悩み苦しみながらそ
れを乗り越えていくことが人生であり、そ
のため努力それ自体が幸福なのだと思います。

残りの人生に与えられた弁護士としての
仕事。人の悩みや苦しみに寄り添っていく
ことができる職業です。少しでも高齢者な
どの役に立てる「人に優しい」「人の痛み
が分かる」弁護士を目指したいと考えてい
ます。

私の弁護士への挑戦について、すべて
を短い紙幅に書き尽くすことはできませ
んでしたが、私は、さる8月に『65歳で
司法試験合格 私の勉強法』（はる出版）
を上梓し、そこに詳しく書きましたので、
興味のある方は、ご一読頂ければ有難い
と思います。

